

美術教育学の制度的基盤の成立過程 —鳥根大学における人的制度と配置—

有田 洋子*

Yoko ARITA

A Historical Research on Establishment of the Staff of Art Education in the College : The Case of the Faculty of Education of Shimane University

要 旨

鳥根大学における美術教育学の制度的基盤の成立過程を、人的制度と人的配置の調査から次のように明らかにした。1. 鳥根師範学校から鳥根大学教育学部への移行期：鳥根師範学校から鳥根大学教育学部へ美術関係教官は概ね移行した。初期の美術講座は、書道の金森米三郎、図画（絵画）の井上善教、工作（工芸）の天野茂時、図画工作（絵画工芸）の小谷忠芳という体制で始まった。小谷を除き全て鳥根県及び鳥根師範学校関係の出身であった。この時期、美術科教育を専門に担当するあるいは研究内容とする教官は不在であった。「美術教育学」は認識されていなかった。2. 学科目制度の発足と具体的人員の配置：昭和44年度まで書道・絵画・彫塑の学科目のみであった。昭和45年度より美術科教育を置くこととなり、石野眞が配属された。昭和51年に、東京芸術大学大学院（美学）修了の猿田量が美術科教育担当として赴任し、石野は構成へ移行した。猿田の赴任により、制度上は美術科教育の人的整備は確定した。3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：平成7年に美術教育専攻の大学院が設置された。その際、猿田は美術理論・美術史へ移った。大学院設置のため新たに美術科教育担当が必要となり、鳥根大学教育学部卒業生の間鍋武敷、筑波大学大学院（芸術教育学）で学んだ川路澄人が採用された。この二人から美術科教育専門の教官が在職することになった。鳥根大学の場合、この時期に制度的に美術教育学が成立した。また鳥根大学の場合の特徴に、大学発足当初は出身地が鳥根、出身校も鳥根師範学校関係の教官が多かったことが挙げられる。その後、師範学校教官の退官と、学科目制度発足による教官の専門性の明確化に伴い、様々な出身地及び出身校の者が赴任した。また鳥根大学設置当初は、全国的にそうであったように教科専門が重視されていた。その後、学科目制度発足や大学院設置に伴い、徐々に教科教育専門が重視されていった。

【キーワード：美術教育史，美術教育学，学科目，大学院】

1. 本稿の目的

現在、美術教育学は、美術専門とは異なる独自性をもった一つの学問研究の対象としてある。また、美術教育学の専門的研究者がおり、その授業が大学でなされている。しかし、このようになったのはそう古い時代ではない。少なくとも戦前の師範学校では、図画教授法は図画専門内容と未分化であり、図画教育学としての独自性は認識されてはいなかった。それでは美術教育学はどのように成立していったのか。

教員養成大学・学部における美術教育学の成立には、実質的な学問としての成立と人的制度の成立がある。美術教育学の成立は人的制度と人的配置が先行し、その後、実質的内容が整備されていく過程となる。具体的には、戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部、そして教科教育専攻大学院へと変遷するなかで、美術教育学の人的制度と人的配置が確立していく¹⁾。それは美術教育学が成立したことと同義ではないものの前提としてある。しかもその人的配置の過程はとても興味深い。

直接的な関係者が亡くなりつつあることを考え、美術

教育史研究の対象として確立しておきたい。また、現在、美術教育学研究の独自性は認められているはずであり、その内容を精緻化していく段階のはずである。しかし、国立大学法人化以降の教員定員減のためか、美術科教育担当者が美術専門の授業を担うことが全国的に増えつつある。美術教育学は多くの悲喜交々のドラマを経て、そして先人の努力の上に確立したことを銘記しておきたい。

美術教育学の制度的基盤の成立過程を、全国の教員養成大学・学部における人的制度と配置の調査から明らかにしていくことを目指している。これまでに本稿筆者は鳥根大学・茨城大学・富山大学・岡山大学・大阪教育大学の場合について口頭発表を行った²⁾。本稿は、鳥根師範学校及び鳥根大学教育学部の美術関係教官の配置の検討を通して、鳥根大学における美術教育学の制度的基盤の成立過程を明らかにするものである。教科教育が未分化な師範学校時代から、それが確立した大学院設置後までを対象範囲とする。具体的な時期範囲は前後に拡大もできるが、とりあえず数字の区切りがよい昭和10年から平成15年までとした。

* 鳥根大学教育学部芸術表現教育講座

2. 調査の要点としての時期区分

第33回美術科教育学会富山大会での美術教育史研究部会で金子一夫は「美術教育学の制度的基盤の成立過程」(『美術科教育学会富山大会研究発表概要集』平成23年3月所収)³⁾で次の問題点を挙げる。

1. 戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部への移行
2. 学科目制度の発足と具体的人員の配置
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開
4. 美術科教育学関連学会の変遷
5. 美術科教育学は成立したか

本稿はその趣旨を踏まえつつ1.2.3.の時期に焦点をあてたい。1.2.3.の時期を次のように捉える。

1. 師範学校から教員養成大学・学部に移行して間もない頃は「美術教育学」というものは認識されていなかった。その背景として一つには、師範教育の反省すなわち固くて狭い視野の克服のため、戦後の教員養成は教科教育の専門性よりも教養教育が重視されていたことが挙げられる。つまり教科専門に重きが置かれ、全国的に美術講座は実技が中心に据えられていた。もう一つには、図画工作に関することなら何でもできた師範学校教官が在職していたことが挙げられる。つまり教官に細分化された特定の専門は制度的に決まっていなかった。また当時を知る花篤實によれば、戦後の教員養成の制度の中で、特に芸術系は実技中心に構成されたために、美術教育は実技教官の「余技」として扱われることが多かった、とも示される⁴⁾。

2. 昭和39年学科目制度発足により学科目「美術科教育」ができた。学科目制度発足により、美術講座は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の学科目を置くこととなった。教官の専門性が明確化された。ただ学科目ができて、担当者の研究内容との整合性は完全ではなかった。この時期、美術教育の専門的な研究者は僅かにしか存在しなかった。美術科教育の担当は、実技に熟達した者こそ相応しいというような名誉として引き受けた、あるいはやむなく請け負わざるを得なかった実技教官や、小・中・高等学校での教職経験者が担う場合があった。美術専門ができれば美術教育研究もできる、美術教育実践ができれば美術教育研究ができるというように捉えられていたことがうかがえる。その他、美術科教育研究は実技ではなく理論であり、論文を書くことから美学や美術史の研究者が担う場合もあった。美術科教育の担当者をめぐって大学により様々な対応がとられた。制度上「美術科教育」は発足したが、美術教育研究の独自性はまだ完全には認識されていなかった。

3. 教科教育専攻大学院設置により、美術科教育研究の専門性が確立していった。美術科教育専攻大学院設置のためには、「美術科教育」に講義及び学位論文の指導が担当できるマル合教員と、講義及び学位論文指導の補助が担当できる合教員が一人ずつ必要であった。もちろん美術教育学に関する業績が審査対象とされた。大学院

設置の頃、必要に迫られて美術教育学が制度的に成立したと言えよう。

本稿では、島根大学が1.2.3.の時期をどのように進んだのかを明らかにする。

なお、師範学校の美術関係教官の出身母胎は、東京美術学校図画師範科、東京高等師範学校図画手工専修科、文部省検定試験が中心である。その他、広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科等もある。ただ広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科の場合、昭和8年3月卒業の一回限りであった。

3. 島根大学の場合の概観

島根師範学校から島根大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行できた。初期の島根大学美術講座は、書道の金森米三郎、図画(絵画)の井上善教、工作(工芸)の天野茂時、図画工作(絵画工芸)の小谷忠芳という体制で始まった。昭和39年まで教授に昇任する教官はなく、昭和38年には天野が技術科に移籍した。ただ、美術講座内に関しては、出身地や出身校が同様のメンバーが揃い、全国的に見れば、比較的安定した大学への移行期とその後の展開であったと言えるかもしれない。この時期、美術科教育を専門に担当する教官あるいは研究内容とする教官はいなかった。「美術教育学」というものは認識されていなかった。

昭和39年の学科目制度発足の頃から昭和45年まで、書道・絵画・彫塑の学科目しかなく、いわゆる不完全講座と呼ばれる状態であった。昭和45年より美術科教育を置くこととなり、助手であった石野眞が講師となって配属されることとなった。昭和51年になって、東京芸術大学大学院美術研究科(美学専攻)を修了した猿田量が美術科教育担当教官として採用され、石野は構成へ移行した。その後大学院設置の頃まで島根大学の美術科教育は猿田一人が担当した。猿田の赴任により、制度上は美術教育学の人的整備は確定された。

平成7年、大学院に美術教育専修が設置された。その際、猿田は美術理論・美術史へ移った。猿田の修了論文題目は「批評の不在」であり、大学赴任後も美術教育研究とともに美術理論研究を続けた研究者でもあったためであろうか。大学院設置のためには美術科教育にマル合と合の教官を揃えることが必須条件であった。新たに美術科教育担当者にマル合と合一人ずつ必要となり、大阪で中学校教員として活躍していた島根大学教育学部卒業生の間鍋武敷、筑波大学大学院博士課程芸術学研究科芸術学専攻(芸術教育学)で学び、鹿児島で公立学校講師をしていた川路澄人が採用された。この二人から純粋に美術科教育専門の教官が勤務することになった。島根大学においてはこの時期に制度的に美術教育学が成立したと言える。

昭和10年から平成15年までの島根県師範学校、島根師範学校、島根大学教育学部における美術関係教官の人的配置を表1に示しておく⁵⁾。

4. 各時期区分における様相

(1) 島根師範学校から島根大学教育学部への移行期

① 大学への移行期 昭和24年5月、松江高等学校、島根師範学校、島根青年師範学校を母胎として、島根大学は発足した⁶⁾。発足当初、教育学部と文理学部が設置された。教育学部は、島根師範学校男子部（松江市）、島根師範学校女子部（浜田市）、島根青年師範学校（出雲市）を母胎として発足した。なお島根青年師範学校に図画工作教官は確認されなかった。教育学部発足当時、島根大学教育学部松江本校と島根大学教育学部浜田分校と島根大学教育学部出雲分教場があった。その後、出雲分教場は昭和25年4月に、浜田分校は昭和27年3月に廃止された。なお、大学発足と同時に師範学校は廃止されたわけではなく、師範学校在校生が卒業するまでの間、師範学校が併置されていたことが多かった。師範学校在校生が大学へ編入する場合もあった。教官の異動に関しても、大学に籍を置く者と師範学校に籍を置く者が共存したり、兼任したりした。島根大学の場合も昭和26年3月まで島根大学島根師範学校が併置されていた。このように大学への移行は徐々に進んでいった。

美術講座に関して、島根師範学校から島根大学教育学部へ人員はほぼ移行できた。初期の島根大学美術講座は、図画（絵画）の井上善教、工作（工芸）の天野茂時、図画工作（絵画工芸）の小谷忠芳、書道の金森米三郎という体制で始まった。昭和20年以降に島根師範学校及び島根青年師範学校に在職しながら大学には移行しなかった教員として、大瀧直平、田中正、景山浩基が確認された。

井上善教（明治44年—昭和52年）は島根県飯石郡三刀屋の覚専寺住職佐々木龍順の六男に生まれた⁷⁾。昭和7年に島根県師範学校本科第1部を卒業し、同年に松江市雑賀尋常小学校訓導、そして昭和11年に島根県師範学校訓導となった。同年8月、文部省検定試験合格により中等学校西洋画用器画の免許状を取得し、昭和14年に島根県師範学校教諭となった。昭和18年に島根県師範学校は官立の島根師範学校となった。昭和18年に同校教諭、昭和20年に同校助教授として男子部に勤務した。昭和24年7月より島根大学教育学部助教授となった。担当は図画（絵画）であった。

天野茂時（明治39年—昭和45年）は島根県松江市の出身であった⁸⁾。昭和3年に島根県師範学校本科第二部卒業、昭和4年に島根県師範学校専攻科卒業の後、島根県公立尋常高等師範学校訓導、島根県公立農林学校土木技術教師として勤務した。昭和11年に中等学校手工科免許状を取得した。翌12年から島根県公立青年学校教諭等を経て、昭和14年4月には朝鮮総督府の公州女子師範学校教諭となった。昭和22年に島根師範学校男子部勤務となる。天野も井上善教と同様に、昭和24年7月より島根大学教育学部助教授として在職していたはずであり、そのように示す資料もあるが、『島根県教育関係職員録』では昭和25年5月1日現在において島根大学島根師範学校勤務とある。担当は工作（工芸）であった。

小谷忠芳（明治44年—平成10年）は、山口県山口市の出身であった⁹⁾。昭和4年に広島県私立山陽中学校を卒業し、昭和8年に広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科を卒業した。昭和8年より大阪府公立高等学校訓導、福岡県公立中学校教諭、兵庫県公立中学校教諭、広島県公立高等女学校教諭として勤務した。そして昭和24年5月に島根師範学校女子部に赴任した。昭和25年1月より島根大学島根師範学校と島根大学教育学部（浜田分校）講師とを兼任したはずであるが、『島根県教育関係職員録』では昭和25年5月1日現在において島根大学島根師範学校勤務とある。昭和26年3月、島根師範学校の廃止に伴い、島根大学教育学部（浜田分校）講師となり、さらに昭和27年3月に島根大学教育学部松江本校に異動した。担当は図画工作（絵画工芸）であった。

金森米三郎（明治38年—平成11年）は島根県簸川郡檜山村の出身であった¹⁰⁾。大正13年に島根県尋常科本科正教員養成所を修了し、尋常科正教員の免許状を取得した。その後幾つかの講習を受けて小学校本科正教員の免許状を取得した。さらに昭和9年に文部省検定試験（中等教員習字科）に合格し、昭和12年3月より島根県師範学校教諭となった。昭和18年に官立となった島根師範学校の男子部に助教授として勤務した。上記の井上と同様に、昭和24年7月より島根大学教育学部助教授として在職していたはずであり、そのように示す資料もあるが、『島根県教育関係職員録』では昭和25年5月1日現在において島根大学島根師範学校勤務とある。担当は書道であった。

なお、昭和21年以降に島根師範学校に在職していながら大学へ移行しなかった大瀧、田中、景山に関しては次の通りである。島根師範女子部に在職していた大瀧直平は昭和24年に富山大学教育学部に異動した。大瀧は新潟出身で、昭和8年に広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科卒業生であった。永く富山大学教育学部で教鞭をとり後進を育てた。昭和24年度までは島根師範学校女子部で、昭和25年度からは島根大学島根師範学校で書道を教えていた島根県浜田出身の田中正は、島根大学へ移行しなかったものの、後に島根大学教育学部非常勤講師として赴任することとなった。昭和21年度に島根師範学校男子部で工作を教えていたことが確認された島根出身の景山浩基に関しては、その後の動向は不明であった。いずれにしろ三名とも大学発足までの在職期間は短い。

島根師範学校から島根大学教育学部へ移行した教員に関して次のような傾向がうかがえる。1. 出身地が島根で、出身校も島根師範学校関係であること。2. 松江にあった男子部勤務であること。3. 在職期間が長いこと。

特に1の傾向は島根大学の場合に特徴的であり¹¹⁾、昭和12年の金森、昭和14年の井上の赴任の頃から、徐々に顕著になっていったように見える。昭和10年代後半には、東京美術学校図画師範科や東京高等師範学校図画手工専修科の出身者、あるいは出身地が島根以外の文部省検定合格者で、島根県師範学校および島根師範学校の美術関係教官として永く在職した者は確認されなかった。

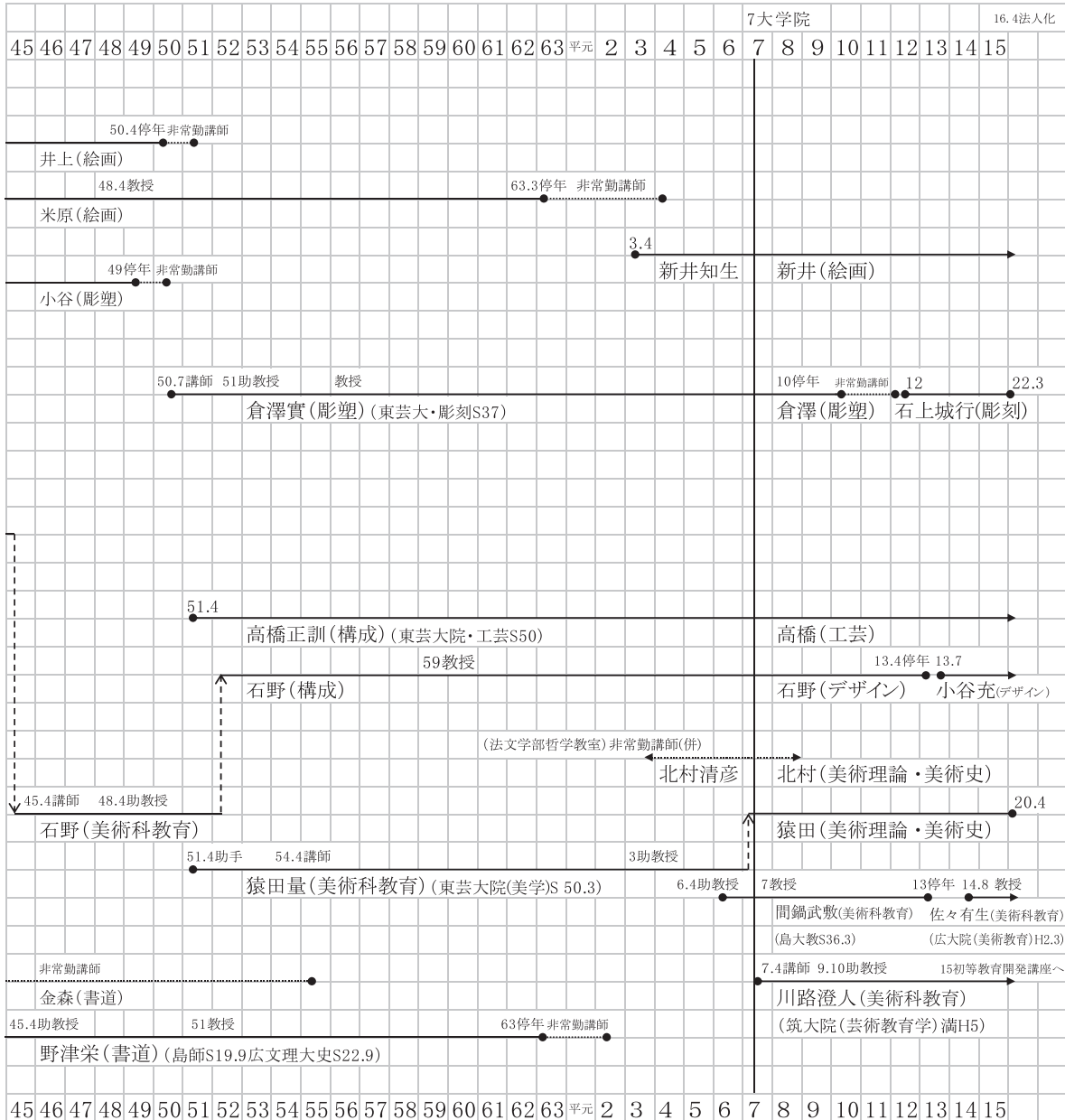
表 1

学科目	昭10	昭11	昭12	昭13	昭14	昭15	昭16	昭17	昭18	昭19	昭20	昭21	昭22	昭23	昭24	昭25	昭26	昭27	昭28	昭29	昭30	昭31	昭32	昭33	昭34	昭35	昭36	昭37	昭38	昭39	昭40	昭41	昭42	昭43	昭44
絵画	18官立島根師範学校 24.5教育学部 26.3島根大学島根師範学校廃止																		39学科目制度																
	S7.3島師教諭 坂元一男(図)(東美図師S7.3)																																		
	11.3附訓導 14.10島師教諭 18.4男子部教諭 20.12男子部助教																		24.7島大助教教授																
	井上善教(図画・絵画)(島師本科)																		一S7.3 文検・西洋画用器画S11)																
彫塑	S5 島女師教諭																		島女師教諭 18助教 女子部 富山大学転出																
	長井八十一(図・手工) 田原幸三(図画手工)																		大瀧直平 小谷忠芳(図画工作・絵画工芸)(広高師二S8.3)																
	(文検・西洋画用器画T15)																		(図画工作)																
	島女師講師																		24.12島大師 25.1島大浜分講師(兼)26.3島大浜分講師																
	山本一男(手)																		34.4助教 39.4助教 (島師本科S19.9)																
	島女師講師 島師教諭																		米原智(絵画)																
	花田定富(手) 上向徳章(手工)																		33.4附小教諭 34.4講師																
	島師教諭 島師教諭 島師教諭 島師教諭(休職) 男子部教諭 22.3男子部																		24.7島大助教教授 38異動 技術(電気)へ																
構成	原稲生 森一雄 大坪実 瀬沢幸男 景山浩基																		天野茂時(工作・工芸)(島師本科二S3.3島師専S4.3)																
	(手工)(手工)(手工)(手工)(手工)																		助手 助手 37.10助手																
	東高師 東高師 東高師 東高師																		角守久(工芸) 高橋俊英(工作) 石野眞(彫塑)(島大教S35.3)																
	図手S6.3 図手S12.3 図手S9.3 図手S15.3																																		
美術理論・美術史																			30島大教講師(構成学)併																
																			29.4附中教諭 31助手 36転出:山口大学 →東京学芸大学 細田育宏 (島師予科S25.3 東大教芸工建S26.3)																
美術科教育																																			
書道	島師教諭 12.3島師教諭 18.4男子部助教																		24.7島大助教教授																
	岸田隆一(習) 金森米三郎(習字・書道)																		(島尋本正T13 文検・習字S9)																
	島女師 島女師 島女師講師 女子部教諭 島大師																		39.4非常勤講師 44.4講師 (22.9-25.3島師附中教諭)																
福政定男(体・習) 吉田栄(習) 山本一男(習字) 田中正																		(書道)																	

昭和39-43年度	昭和44年度	昭和45-48年度	昭和49年度
絵画 井上 米原	絵画 井上 米原	絵画 井上 米原	絵画 井上 米原
彫塑 小谷 石野	彫塑 小谷 石野	彫塑 小谷 石野	彫塑 小谷 石野 (停年後非常勤講師)
書道 金森 野津 (非常勤講師)	書道 金森 (停年後非常勤講師) 野津	書道 金森 (停年後非常勤講師) 野津	書道 金森 (停年後非常勤講師) 野津

凡例

- 横の実線は在職期間を示す。点線(---)は非常勤講師としての在職期間、破線(---)は附属校在職期間、一点鎖線(---)は休職期間を示す。
- 横の線の両端の数字が就任と退任の年月を表す。
- 横の線の端が黒丸の場合は就任あるいは退任の年(月)が明確であることを示す。
- 横の線の橋が矢印の場合はその時点までの勤務が確実であることを示す。
- 横の線の上部には職位とその就任年月を示す。平成23年現在在職する教員に関しては示さないことを原則とする。
- ただし本稿研究主題とも関係する美術科教育を担当する場合は示すこととする。
- 人名の後の括弧内には学科目ないし担当教科を示す。さらにその後、修学校名の略記と卒業あるいは修了年月を示す。



昭和50年度

絵画 井上 (停年後非常勤講師)
米原
彫塑 倉澤
美術科教育 石野
書道 金森 (停年後非常勤講師)
野津

昭和51年度

絵画 米原
彫塑 倉澤
構成 高橋
美術科教育 石野
書道 猿田
金森 (停年後非常勤講師)
野津

昭和52年度

絵画 米原
彫塑 倉澤
構成 石野
美術科教育 高橋
猿田
書道 金森 (停年後非常勤講師)
野津

平成7年度

絵画 新井
彫塑 倉澤
デザイン 石野
工芸 高橋
美術理論・美術史 猿田
北村(法文併)
美術科教育 間鍋
川路

○修学校の略記は以下に行う。

島師：島根県師範学校(昭和17年以前)。島根師範学校(昭和18年以降) 島女師：島根県女子師範学校。
男子部：島根師範学校男子部。女子部：島根師範学校女子部。一：第一部。二：第二部。島尋本正：島根県尋常科本科正教員養成所。
島大師：島根大学島根師範学校。島大教：島根大学教育学部。 島大浜分：島根大学教育学部浜田分校。
文検：文部省検定試験。 東美校図師：東京美術学校図画師範科。 東芸大：東京芸術大学。
東高師図手：東京高等師範学校図画手工専修科。 東教大：東京教育大学。 筑大：筑波大学。
広高師二：広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科。 広文理大史：広島文理科大学史学科。 広大：広島大学。

ただそれ以前には様々な出身校や出身地の教官が共存して在職した時期もあった¹²⁾。昭和10年代前半は、東京美術学校図画師範科出身者では坂元一男（鹿児島）が長年在職していた。東京高等師範学校図画手工専修科出身者では、森一雄（長野）、大坪実（兵庫）、瀬沢幸男（兵庫）、原稲生（福岡）が在職した。後に原は東京学芸大学、森は学習院に赴任する。文部省検定試験合格者では長井八十一（徳島）が長年にわたって島根県女子師範に在職した。

それが昭和15年以降になるとほとんどが島根出身者かつ島根師範学校関係の出身者で文部省検定試験合格者の教官となる。

他大学では師範学校から大学への人員の移行は天下分け目の大問題となったこともあった。出身校による対立、例えば、東京美術学校図画師範科出身者たちと東京高等師範学校図画手工専修科出身者たち、どちらが大学に移行するかで生々しい対立が起きた大学もあった。そのような当時の様相からすると、島根大学の場合は、大学への人員の移行は比較的スムーズであったと言えよう。

②大学移行後の展開 さらに大学移行後の展開を見る。いくらかの人員の出入りはあるものの、出身地が島根で、出身校も島根師範学校関係であることの原則は、昭和50年まで維持された。

他大学では、大学発足直後、師範学校教官のみの講座には、学士取得者、旧帝大系教官、東京美術学校出身等の実技の実力者、日展等の当時社会的に認められていた展覧会の実力者などが新たに赴任することがあった。そのような場合、それらの教官は最初から教授として赴任する等、職階や待遇が厚かった。それに対して師範学校教官は講師や助教授に据え置かれる等、不遇の時代を迎える大学もあった。

それらと比べると島根大学の場合、美術講座内においては、大学発足後も安定していたと察せられる。しかも卒業生は、島根の美術教員となり、島根大学教官が上層に位置する島根洋画会に出品し、そこでの位置づけが教育現場での位置づけとも関連していたこともあったらしい。島根の美術教育界および美術界は島根大学を中心に循環していた様子がうかがえる。

ただ島根大学教育学部内の美術講座としては特異なこともあった。工作（工芸）の担当をして、仏像等の日本美術史の研究をしていた天野¹³⁾が、昭和38年に技術科（電気）に移籍した。天野は移籍後も日本美術史関係授業を担当していたようであった。さらに昭和39年まで教授に昇任する教官はなかった。

大学発足直後の書道の金森、図画（絵画）の井上、工作（工芸）の天野、図画工作（絵画工芸）の小谷という体制の後の、島根大学教育学部の美術関係教官の在職状況は次の通りである。

昭和27年から、順に、角守久、高橋俊英、細田育宏^{やすひろ}が助手として勤めた。皆、出身地は島根で、島根師範学校あるいは島根大学教育学部の出身であった。角と高橋の

在職期間は短い¹⁴⁾、細田は5年間も助手を勤めた。細田は昭和25年に島根師範学校卒業後、東京教育大学教育学部芸術学科に進学し、卒業後すぐに島根大学教育学部附属中学校教諭となり、島根大学教育学部助手、山口大学教育学部講師を経て、東京学芸大学に赴任し同大学名誉教授となった¹⁵⁾。

そして昭和34年に米原智が絵画担当の講師として赴任した¹⁶⁾。米原は島根師範学校卒業生で、在学時期からすると、井上、金森に教わっていたであろう。昭和19年に島根師範学校卒業後、島根県公立学校教員を経て、昭和33年島根大学教育学部附属小学校教官となった。そこからの異動であった。昭和63年まで在職した。

③この時期の教科教育関係授業 この時期の島根大学には、美術科教育専門の担当教官は不在であった。そうは言っても当然ながら教科教育関係授業は実施された。では誰が担当したのか。担当者を明示した資料を確認することはできなかった。ただ、当時のことを知る方によると、小谷が担当していたとのことであった。これは全国的に言えることではあるが、美術専門教官は教科教育を担当したがる傾向があった。島根大学の場合も皆担当したがらなかったらしい。そこで、唯一出身が島根県師範学校ではなく広島高等師範学校第二臨時教員養成所であり、在職歴も短い小谷に白羽の矢が立ったようであった。もっとも小谷は、卒業制作は洋画・日本画・彫塑・金工・木工、業績は絵画・彫塑・図案・写真と多岐にわたり、小・中・高等学校教員の経験もあり、島根師範学校及び島根大学赴任後も図画（絵画）も工作（工芸）も担当しており、そういったことから適任とされたのかもしれない。また小谷は自身の退官記念講演会で「美術教育にたずさわるものは平面と立体と両方に通じ、またその周辺及び歴史にも学ぶのがなければならない」と説いたらしい¹⁷⁾。小谷の美術教育観が垣間見える。まさに美術に関することならば何でもできた師範学校教官らしい様子がうかがえる。いずれにしてもこの時期の小谷は多忙であったらしい。そのような時期に、細田の山口大学転出に伴い昭和36年度は助手が不在となった。このような状況で、新たに助手として採用されたのが、石野真であった¹⁸⁾。石野は昭和35年に島根大学教育学部を卒業し、大阪市公立中学校教員をしていた。小谷とも関係があったらしい。

①②③に分けて見てきたが、島根師範学校から島根大学移行期において、美術科教育を専門に担当するあるいは研究内容とする教官はいなかった。そして「美術教育学」というものは認識されていなかった。また島根大学の場合の特徴として、大学へ移行した教官には出身地が島根で出身校も島根師範学校関係である者が多いことが挙げられる。そのため大学移行後の展開も、美術講座内においては比較的落ち着いて進んでいったであろうことが推察される。

(2) 学科目制度の発足と具体的人員の配置

昭和39年学科目制度発足により、美術講座は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の学科目を置くこととなった。島根大学の場合、学科目制度発足の頃から昭和44年度末（昭和45年3月）まで、書道・絵画・彫塑の学科目のみで、かなりの不完全講座と呼ばれる状態であった。学科目制度発足により、美術科教育の学科目を置かなければならなくなったが、島根大学の場合、昭和44年度末まで担当者不在であった。全国的に見て不在の時期が長かったといえる。そうこうしているうちに文部省から照会もあったらしく、美術科教育を置くこととなり、昭和45年度（昭和45年4月）、彫塑の助手をしていた石野眞が講師となって配属されることとなり、不完全講座の状態は少し改善された。ただ、美術理論・美術史の学科目は以後も未設置で不完全講座の状態はずっと続いていくこととなる。石野は美術科教育に配属となってからもデザイン・構成の授業を担っていたこともあったらしい。その後昭和51年に、東京芸術大学大学院美術研究科（美学専攻）を修了した猿田量¹⁹が美術科教育担当として採用され、石野は構成へ移行した。なお、猿田の採用に際して絵画（油絵）ができることが求められていたようで、赴任後は教科教育関係授業だけでなく絵画（油絵）の授業も担当していたこともあったらしい。その後大学院設置の頃まで島根大学の美術科教育は猿田一人が担当した。猿田は美術科教育学会（昭和57年発足）の前身である大学美術科教育研究会の第1回研究会（昭和54年）からの参加者であった。猿田の赴任により制度上は美術教育学の人的整備が確定された。

また永らく担当者不在であった構成も、昭和51年、東京芸術大学大学院修了の高橋正訓の赴任と、石野の異動により人的に整備がなされた。

学科目制度発足により教官の専門性が明確化されたためか、猿田・高橋の赴任あたりから、出身地や出身校の様々な者が在職するようになった。彫塑の小谷の後任に東京芸術大学美術学部彫刻専攻科卒業の倉澤實、絵画の米原の後任は筑波大学大学院修了の新井知生が赴任した。なお島根大学の場合、美術理論・美術史の専任教官は後に猿田が担当を移るまで不在であった。この時期の在職教官とその所属学科目を表1の下部に示しておく。

なお美術科教育の学科目が置かれる前年の昭和44年に書道の金森が停年退官を迎えた。その後任に島根師範学校卒業生で島根師範学校附属中学校勤務歴もある野津栄が書道担当として採用された。野津は昭和44年から昭和63年まで在職した。島根大学の場合、学科目制度発足後も美術講座に書道が昭和63年まで置かれた。

(3) 教科教育専攻大学院の設置と展開

平成3年に島根大学に大学院教育学研究科が設置された。平成7年に美術教育専攻は設置された。大学院を設置するには資格審査をパスする必要がある、その時期、全国的に教官の異動や専門分野の移動が少なくなかった。島根大学の場合、猿田が美術理論・美術史へ移った。

既述のように猿田の修了論文題目は「批評の不在」であり、大学赴任後も美術教育研究と共に美術理論研究を続けた研究者でもあったためであろうか。なお、大学院開設時に移っていたのは確実であるが、平成6年に既に移っていた可能性もある。大学院設置のためには美術科教育にマル合と合の教官を揃えることが必須条件であった。新たに美術科教育にマル合と合一人ずつ担当が必要となり、大阪で中学校教員として活躍していた島根大学教育学部卒業生の間鍋武敷、筑波大学大学院博士課程芸術学研究科芸術学専攻（芸術教育学）で学び、鹿児島で公立学校講師をしていた川路澄人が採用された。この二人から純粋に美術科教育専門の教官が勤務することになったと言えよう。島根大学においてはこの時期に制度的に美術教育学が成立したと言えよう。

なお、この大学院設置の頃までは、各教官の在職期間が長い。ほとんどが停年退官を迎え、あるいは他大学への転出なく勤めあげた。先述のように、最初期には島根縁の教官が多いので当然でもあるが、山と海に囲まれた環境あるいは文化からして、他との交流よりも独自性が重視されたのかもしれない。これも島根大学の場合の一つの特徴である。

その後の展開を少し示しておく。間鍋の停年退官後は、その後任として、広島大学大学院修了で広島大学教育学部附属学校教員経験もある佐々有生が鳴門教育大学より転入した。川路は学部改組に伴い昭和15年に初等教育開発講座へ移籍した。

島根大学美術講座の場合、美術科教育担当に小・中・高等学校での教職経験者、あるいは実技担当に関しても教職経験者や教員養成意識の高い者があたる傾向があるように思われる。それは島根大学の理念とも合致してのことであろう。

その他、島根大学の場合の特徴として次のことが挙げられよう。第一に、地域とのつながりが強い。大学移行期およびその後の展開は、出身地が島根で、出身校も島根師範学校関係の教官が中心に、地域に根差した研究教育を展開していた。くしくも現在の島根大学のキャッチコピー「人とともに 地域とともに」に通ずる要素がある。大学開学当初からの意識が今に続いているのかもしれない。その後、師範学校教官の退官と、学科目制度発足による教官の専門性の明確化に伴い、様々な出身地及び出身校の教官が赴任することとなる。もちろん教官の出身地や出身校は様々な体制となるものの地域とのつながり重視は変わらない。第二に、教科専門と教科教育専門との関係に関する特徴である。大学設置当初は全国の教員養成大学・学部と同様、教科専門が重視されていた。その後、学科目制度、大学院設置、さらには学部改組に伴い、徐々に教科教育専門が重視されていくという展開がうかがえる。現在の教科専門担当教員もそれらへの意識が高い。

5. 結 論

島根大学の場合の美術教育学の制度的基盤の成立過程を、人的制度と人的配置の調査から以下のように明らかにした。

1. 島根師範学校から島根大学教育学部への移行期：島根師範学校から島根大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。島根大学美術講座は、書道の金森米三郎，図画（絵画）の井上善教，工作（工芸）の天野茂時，図画工作（絵画工芸）の小谷忠芳という体制で始まった。小谷を除き全て島根及び島根師範学校関係の出身者であった。この時期，美術科教育を専門に担当するあるいは研究内容とする教官は不在であった。「美術教育学」は認識されていなかった。

2. 学科目制度の発足と具体的人員の配置：昭和44年度末（昭和45年3月）まで，書道・絵画・彫塑の学科目のみであった。昭和45年度当初（昭和45年4月）より美術科教育を置くこととなり，それまで彫塑の助手をしていた石野眞が講師となって配属されることとなった。昭和51年に，東京芸術大学大学院美術研究科（美学専攻）修了の猿田量が美術科教育担当として赴任し，石野は構成へ移行した。猿田の赴任により，制度上は美術科教育の人的整備は確定された。

3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：平成7年に美術教育専攻の大学院が設置された。その際，猿田は美術理論・美術史へ移った。大学院設置のために新たに美術科教育担当が必要となり，大阪で中学校教員として活躍していた島根大学教育学部卒業生の間鍋武敷，筑波大学大学院博士課程芸術学研究科芸術学専攻（芸術教育学）で学び，鹿児島で公立学校講師をしていた川路澄人が採用された。この二人から美術科教育専門の教官が勤務することになったと言えよう。島根大学においてはこの時期に制度的に美術教育学が成立したと言える。

以上のように，島根大学における美術教育学の制度的基盤は成立したと結論する。

謝辞

調査にあたってご協力いただいた島根大学関係者，茨城大学教授金子一夫先生に厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 第33回美術科教育学会富山大会での美術教育史研究部会で金子一夫が「美術教育学の制度的基盤の成立過程」（『美術科教育学会富山大会研究発表概要集』平成23年3月所収）においてその趣旨として示している。
- 2) 島根大学及び茨城大学の場合は，第33回美術科教育学会富山大会での美術教育史研究部会において平成23年3月25日に口頭発表した（『美術科教育学会富山大会研究発表概要集』平成23年3月所収）。富山大学の場合は，「茨城大学教育学部附属中学校授業

づくり研究会」において平成23年5月7日に口頭発表した。島根大学及び岡山大学の場合は，平成23年度日本教育大学協会全国美術部門協議会中国地区研究発表会において平成23年6月25日に口頭発表した。大阪教育大学及び岡山大学の場合は，第50回大学美術教育学会全国大会（宮城大会）において平成23年9月24日に口頭発表した（『大学美術教育学会全国大会（宮城大会）研究発表概要集』平成23年9月所収）。

- 3) 金子一夫，前掲概要集。
- 4) 花篤實「一 学会の過去と未来」美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』美術科教育学会，平成11年，74頁。
- 5) 次の資料を参照して表を作成した。中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和5-7,9-12年版。中等教科書協会『師範学校中学校職員録』昭和13,14年版。島根県教育会編『島根県内教育関係職員録』昭和5-18,21,22年度。島根県教職員組合編『島根県教育関係職員録』昭和23-36,40,42年度。島根県教育委員会『教職員名簿』昭和33-平成15年度。『島根大学職員録』昭和35-平成15年度。島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第1-60号（昭和27年-平成21年）。島根師範学校同窓会『昭和十四年度同窓会会員名簿』。『島根大学要覧』昭和27年度。昭和5年度から平成15年度にかけて年度ごとの職員録や名簿を確認することを原則としたが，昭和18,19年度のものだけは確認できなかった。なお『島根県内教育関係職員録』によると，昭和15年度の1年のみ女子師範に「手」の講師として山本一男と花田定富がいたが，昭和16年度には山本は「習」講師，花田は「地」講師に移った。二者とも島根出身で前年まで女子師範附属小学校代用浜田町原井尋常高等小学校教諭であった。純然たる手工の担当者ではなかったのかもしれないが，表には資料の記載に基づき示すこととした。
- 6) 島根大学開学三十周年史編集委員会（編）『島根大学史』（島根大学，昭和56年）。
- 7) 5) で示した資料及び島根県立博物館編集・発行『井上善教遺作展』（昭和55年），井上善教「教職回顧 思い出」島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第27号（昭和50年，60，61頁）を参照した。
- 8) 5) で示した資料を参照した。
- 9) 5) で示した資料及び小谷忠芳「教職回顧 思い出」島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第26号，昭和49年，36，37頁を参照した。「教職回顧 思い出」には退官を迎えた小谷本人の回想が記され，最初「浜田の女子師範に赴任した」とある。ただ，これ以外に女子師範赴任を明記する資料はなかった。最初に女子師範赴任ならば，小谷と同窓の大瀧の後任とするのが，小谷の赴任時期と大瀧の異動時期からすると妥当であろう。
- 10) 5) で示した資料及び金森朴堂『遊神帖』（報光社，昭和60年），金森朴堂『座右帖』（八洪会，昭和49年）

- を参照した。
- 11) 『島根県内教育関係職員録』『島根県教育関係職員録』『教職員名簿』には職員の出身地が記されている。他県の職員録の場合、出身地は都道府県単位で記されることが多いが、島根の場合、市郡町村単位で記されていることが多かった。本文において指摘するように、島根師範学校および初期の島根大学の教官は島根出身者が多い。出身地が島根であることは当然ゆえのことなのかもしれない。
 - 12) ただし書道に関しては昭和初期からずっと島根出身の教官が大多数である。島根以外で確認されたのは鳥取の福政定男、岡山の薬師寺毅くらいであった。また書道の特徴に、金森以前の教官は体育等の別教科を兼担していたことが挙げられる。
 - 13) 天野茂時は、大学設置後は工作（工芸）を担当していたが、研究は日本美術史を専門としていたであろう。研究論文が多数ある。文部省内地研究員として京都大学文学部美学研究室に留学もした（『同窓会誌』第2号、昭和27年、40、41頁）。技術科移籍後も日本美術史関係の授業を担当していたことを示す資料もある。
 - 14) 同様の傾向の大学もあるが、島根大学の「当時の助手は、2、3年で学校教育の現場へ出るのが慣例」であったらしい（石野眞「美術教育における細田育宏先生の思い出」細田和子『木工美術 細田育宏の世界』ニューカラー写真印刷株式会社、平成22年、208頁）。
 - 15) 細田和子、前掲書を参照した。
 - 16) 5) で示した資料及び米原智『造形への思索 画業60周年記念 米原智画集』（印刷企画社、平成18年）を参照した。
 - 17) 島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』26号、昭和49年、64頁。
 - 18) 5) で示した資料及び島根デザイン連盟HP (<http://design.shimane.tv/members/ishino.html>)、GLOBAL (<http://jglobal.jst.go.jp/public/20090422/200901074834091269>) を参照した（平成23年9月20日確認）。
 - 19) 5) で示した資料及び美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）を参照した。

